

「赤い糸が切れてくれない」

川島祐介

登場人物

【人物】

早崎創	はじめ	(7)	高校2年生
高坂香那		(7)	創の同級生
倉橋昇介		(17)	創の同級生
坂井詩絵	しえ	(17)	創の同級生
高坂純子		(44)	香那の母
伊井佳織		(17)	高校2年生
遠野未来		(18)	高校3年生
奥田奈津		(16)	高校1年生
鷺尾花恵		(53)	音楽教師
早崎真		(45)	創の父
早崎真梨		(42)	創の母
サッカー選手			
女性タレント			
その他			

あらずじ  
「恋愛なんて時間の無駄だ」あるトラウマか  
ら恋愛嫌いの早崎創（17）はある日、頭を  
強く打ち、自分に好意を持つ女性と赤い糸で  
物理的に結ばれるようになる。好意が強い程  
糸は太く短くなり、糸の範囲に強制的に引き  
ずり込まれてしまう。恋愛をしたくない創は  
糸を切るために次々と女性に暴言を浴びせ、  
その都度女性に殴られていく。  
ある日、創は高坂香那（17）と赤い糸で  
結ばれてしまう。絶対に恋愛をしたくない。  
創は糸を切ろうと暴言を浴びせるが創が大好  
きな香那には逆効果で糸が太くなっていき創  
は香那と母親の遊園地への行楽についていく  
ことに。そこで創は香那の母親思いという意  
外な一面を知る。香那の家にも仕方なくつ  
ついていくことになる創。そこで創は自分と  
同じように香那も同じ孤独を抱えていること  
を知る。  
翌日、相変わらずべったりくっつく様子を  
香那の友人、坂井詩絵（17）に見つかって  
しまう。詩絵も創を好きだったことを知って  
いた。香那は詩絵のことを思い、創のことを諦  
める。それにより創との糸が切れ自由になっ  
たと喜ぶが香那の涙を見て動揺する。  
自宅に至福の時だという1人の時間を満喫  
する創。しかし脳裏には香那のことばかり浮  
かんで全然楽しめない。ふと指の糸を見ると  
キラキラ光る真っ赤な糸が結ばれていること  
に気づく。本当の運命の赤い糸である。創は  
その糸を見て香那の元に駆け出していく。  
香那と対面した創は母親思いで友達思いの  
香那が気づかずに仕方がなく、自分と同じく孤  
独を知っているが仲間の輪に飛び込んでいく  
香那に憧れていたと告げる。そして香那はそ  
こに現れた詩絵に創のことを諦めろと迫られ  
るが創に自分の気持ちに嘘をつくなと言われ、  
自分の正直な気持ちを伝える。そんな香那に

指 1 創  
は 翌 人 は  
キラ 日 く 「  
キラ 相 ら 1  
光 変 い 人  
る わ な で  
赤 ら ら いる  
い ず も 時間  
糸 口 論 い が  
で して 好  
結 歩 く 告 き  
ば 創 と げ だ  
れ いた げる だ  
た 香 那 の が  
の 前

○早崎家・外観（朝）

○同・リビング（朝）

早崎創<sup>はじめ</sup>（17）が制服姿で食パンを食ながらテレビを見ている。テレビではサッカー選手と女性タレントが記者からの熱愛発覚の質問に答えている。女性タレント「そうなんですよお。彼がですね、運命の赤い糸で結ばれているって言うてくれたんですう」

サッカー選手「頭を強く打って怪我をした時に看病してくれて、その時にはつきりと赤い糸が見えました。これはもうこの人しかない」と直感しました」

冷ややかな目でテレビを見ている創。

○千賀久野高校・校門前

歩いている創と倉橋昇介（17）

創「くっつだらない。なにが運命の赤い糸だ」  
倉橋「実は二人は子供の頃に出会っていた。

二人が結ばれるのは運命だったんだーとか  
でしょ？ ロマンチックでいいじゃない」

創「そんなもんあるわけないだろ。恋愛なん  
て時間の無駄だ」

倉橋「相変わらずだね。好きな人といった方が  
楽しいじゃない。せつかく創は顔がいいの  
にもったいない」

創「どうせその人と結婚するわけでもないだ  
ろ。それにうちを見てみろよ。関係冷え冷  
えで親父は志願出張し家を出て、母親は心  
を病んで部屋にこもってて最悪じゃねえか。  
恋愛する時間があれば本を読めばいい。そ  
の方が何倍も有意義だ」

やれやれと言った顔の倉橋。そこへ高  
坂香那（17）が後ろからやってきて  
、ちやうど通った自転車を避けようと  
して創と肩がぶつかる。

創「いてっ」

香耶、創の顔を見るとそのまま去ろう  
とする。

創「おい。ぶつかったんだから謝れよ」

香耶「あ？ お前がちんたら歩くのが悪い」

創「ふざけんな。なんだよその言い方は」

香耶「ウゼエ。時間とらせんな、バカ」

そのまま去っていく香耶。

創「なんだよあの口悪いクソ女は！」

倉橋「相変わらず君たち相性が悪いね」

創「女はタチ悪い。絶対恋愛なんてしねえ！」

不機嫌そうな顔の創。

## ○同・2年1組教室

休み時間で談笑しているクラスメイト  
の中、一人、本を読んでいる創。その  
様子を伊井佳織（17）が廊下から見  
つめている。創の隣では香那が数人の  
女子に囲まれている。その中の坂井

詩絵しえ（17）にノートを渡す香那。

香那「はい。先生に質問聞いてきたよ。ノー  
トにまとめたから見てみて」

詩絵「ありがとう。本当に香那って頼りにな

るね」

### ○同・階段

ほうきを持って掃除している創、歩いていた佳織とぶつかる。創は足を滑らせ、階段から落ちていき、壁に頭をぶつける。意識を失う創。

佳織の声「早崎くん！ 早崎くん！」

ゆっくりと目を開ける創。

視界がはっきりとしてくる。

佳織「早崎くん！ よかった。気がついて」

佳織に肩を揺すられている創。

創「あれ？ 俺は一体？」

佳織「ぶつかって足を踏み外したのよ。大丈夫？

夫？ 保健室行く？」

創「あ、いや。大丈夫だ」

ゆっくりと立ち上がる創、左手の小指に赤い糸が結ばれているのに気づく。

創「なんだこれ？」

赤い糸をたどっていくと佳織の小指に



も繋がれている。

創「おい、なんだこれは？」

佳織「これってなに？」

創「決まっているだろ。この赤い糸はなんだって聞いているんだ？」

佳織「？ そんなのないよ」

創「ないって小指に結ばれているだろ？」

佳織「糸なんてないよ。早崎くん、やっぱり

保健室行った方がいいよ」

創「もういい」

去っていく創。赤い糸は繋がったまま。

○メインタイトル『赤い糸が切れてくれない』

○同・2年1組教室

倉橋と机で向き合って話している創。

創「本当に見えないのか？」

倉橋「本当に見えるの？」

創「どうなってるんだ……」

倉橋「でも赤い糸ってあれじゃない？ 運命

の赤い糸ってやつ」

創「まさか……」

倉橋「よかったじゃない。結婚相手を探す手間が省けて」

創「冗談じゃない！」

創、机の中からハサミを取り出し、糸を切ろうとする。だが糸は切れない。

倉橋「なにしてんの？」

創「決まっているだろ。糸を切るんだよ」

倉橋「なに運命の糸を切ろうとしてるんだよ」

糸は手応えなく切れそうで切れない。

創「くそっ、切れねえ」

ハサミを机の上に置く創。

倉橋「切れないから運命の糸なんだろ」

創「これがある限り俺に自由はない。いったいどうしたら……」

倉橋「よっぽど嫌われない限り無理だね。諦めな」

創「それだ！」

創、教室の外へ飛び出していき扉の近

くで詩絵と話している香那とぶつかる。

香那「いってえな。またお前かよ」

創「ちんたらしているお前が悪い。俺は急いでいるんだ」

走り去っていく創。

香那「ウゼェ」

舌打ちする香那。

詩絵「香那って早崎くんに対して厳しいよね」

香那「あいつ見てるとなんかイライラする」

機嫌悪そうな香那を見て微笑む詩絵。

### ○同・廊下

嬉しそうな佳織と対面している創。

佳織「話ってなにかな？」

創「俺はお前のことが嫌いだ」

佳織「えっ」

創「お前を見ただけで吐き気がする。もう2度と俺の視界に入らないでくれ」

佳織「そ、そんな」

涙ぐむ佳織。すると二人を繋いでいた

赤い糸がスツと消えてなくなる。

創「やった！消えた！これで俺は自由だ」

満面の笑顔になる創。

小刻みに震えている佳織。

佳織「なにが……」

創「え？」

佳織「何がそんなに嬉しいのよ！」

佳織に頬をビンタされる創。

去っていく佳織。

創「くそっ。でもこれで晴れて自由に……」

ふと小指を見ると赤い糸が繋がっている。眉をしかめる創。

### ○ファミレス・店内（夕）

頬を腫らして座っている創と倉橋。

倉橋「それでその腫れた頬と引き換えに自由になったのにまた糸がくっついてきたと」

創「なんでこんな目に……」

左の小指を顔の前に出す創。繋がれた小指の糸が伸びる先にウエイトレスが

いて水を汲んで接客している。

創「はぁ。行ってくる」

倉橋「いってらっしゃい。頑張ってるねー」

創が立ち上がってウエイトレスの元に近づいているのを見ている倉橋。そして創が何か話して、水をかけられ帰ってくるのを迎える。

倉橋「おかえり。これでもうこの店には来づらくなったね。鼻屑にしたのに残念」

ハンカチで濡れた髪をふく創。

創「それよりどうして赤い糸がまた繋がってきたんだ？」

倉橋「うーん。おそろいだけどその糸は運命の赤い糸ではなく、好意を寄せる相手から伸びてきているんじゃない？」

創「なんだよそれ？」

倉橋「つまり創は一人でいたいと思うあまり自分に好意を寄せる女性の視線や仕草を敏感に感じ過ぎて赤い糸という形で現れたんじゃないかな？ でもこれは悪いことじゃ

ないよ」

創「どうということだ？」

倉橋「別に放置していてもいいってことさ」

創「なるほど。それならいい」

ほっと安心する創。そこへ仕事上がり  
の女性が調理室から出てきて、創と目  
があう。すると太く短い糸が創の小指  
に巻きつく。見る見る赤面する女性。

創「（ため息して）まあいいや。無視無視」  
逃げるように去っていく女性。すると  
糸はピンと張り、その力により創は女  
性の元へ地を這って引きずられて行く。

創「いたたたたたた」  
倒れたまま引っ張られて行く創。

呆然としている倉橋。

創「ちよつと！ その君待って！」  
女性が立ち止まり、糸が緩んで創も止  
まる。息を切らす創。

創「どうということだ？」

× × ×

目の下を腫らした創をみて倉橋がプツと吹き出し笑いする。倉橋を睨む創。

倉橋「今までの現象をまとめてみると創のこ  
とを思う女性がいれば糸が巻きついてくる。  
糸を切っても次々と巻きついてくる。1人  
ずつだから早い順で視界に入る相手のみだ  
と思う。そしてその想いが強ければ強いほ  
ど糸は太く短くなり、その糸の長さの範囲  
内に創が引きずり込まれるということだね」

創「最悪だ……」

頭をかかえる創。

倉橋「これを機に恋愛してみるのもいいじや  
ない」

創「冗談じゃない！」

倉橋「創にはトラウマがあるからねえ」

創「それは言うな。思い出したくもない」

深くため息をつく創。

### ○早崎家・創の部屋（夜）

部屋に入ってくる創。

創「今日は災難だった。忘れよう」

創、リクライニングチェアに座り、音楽コンポを再生する。クラシックが流れる中、ショーロックホームズシリーズの小説を読む創。

創「あー幸せ。やっぱり一人が一番だ」  
幸せそうにくつろぐ創。

### ○千賀久野高校・空き教室

遠野未来（18）と対面している創。

創「先輩、俺なんかにかまわず将来のこととか考えたほうがいいですよ。あまり頭が良くなさそうですし」

未来にビンタされる創。

未来との糸は切れていない。

創「あれ、まだ足りないか」

未来「当たり前だ。10発は殴らないと気が済まない」

創「え」

未来「すまないな。頭が足りないから常識と



か分からないんだ」

創に詰め寄る未来。

創「ひいひいひい」

○同・玄関前

奥田奈津（16）と対面している創。

創の両頬は腫れ上がっている。

創「そういうわけで君とは付き合えない」

奈津「そうですか…… わかりました……」

創「よし。じゃあ俺を殴ってくれ」

奈津「えっ。どうしてですか？」

創「未練を残さないようにしてもらわないと

ダメなの。糸が切れないの」

奈津「そんなの嫌です」

創「いいから早く俺を殴ってくれ」

奈津に詰め寄る創。

奈津「うわぁ、気持ち悪い！」

創と奈津をつなぐ糸が切れる。

逃げるように去っていく奈津。

創「これ、俺ただの変態じゃないか……」

○同・音楽教室

ぐったりした創、教室に入ると気合の入った若作りメイクした鷺尾花恵

（53）と糸が繋がっている。

創「先生。いろんな意味で無理です。勘弁してください！」

○同・2年1組教室

満身創痍で机にうなだれている創。

倉橋が近づいて、

倉橋「そこまでして一人がいいかな？」

創「俺は毎日部屋でクラシックを聴きながら

ミステリ小説を読みさえすればいいんだ。

神様もう勘弁してください」

廊下を香那含む女の子たちが通り過ぎるのを見る創。するとまた太い糸が小指に巻きついてくる。

創「なあ。なんで俺はこうモテるんだ？」

倉橋「それ、素で言ってるならすげえ腹立つ」

創「教えてくれよ。対策するからさ」

倉橋「そうだな。一度女の子に聞いてみたことがあるんだ。創のどこが好きなの？ つて」

創「おお。それで？」

倉橋「佇まいというか、ただ座っているだけでも雰囲気があって色っぽいんだって」

創「なんだよそれ。どうしようもないじゃん」

倉橋「そうだねー」

創「はあ。行ってくる」

倉橋「恨むなら端正な顔に生まれた自分を恨むんだね」

立ち上がり教室を出て行く創。

### ○同・廊下

力なく歩いている創、太い糸を見る。

創「結構太いな。次は誰だよ」

廊下を曲がった先に香那が立っていて

創と糸が繋がっている。

創「は？ マジかよ……」

香那「なんだよ。人の顔ジロジロ見やがって。

ウゼエ奴だな」

創「お前、俺のこと好きなのか？」

香那「（動揺して）な、な、なに言ってるんだ」

糸が太くなる。

創「俺はなお前にこれっぽっちも好意なんて  
持ってねえ。迷惑だからやめてくれ」

香那「なに自惚れてんだてめえ。私もお前の  
ことなんか虫酸が走るほど嫌いだ」

糸がさらに太くなることに驚く創。

創「なんで太くなってんだよ。いいから俺の  
ことを嫌いになれ。そしてお前と見合うし  
ようもない男と結ばれちまえ」

香那「だから私もお前のこと大嫌いだって言  
ってるんだろ！ いい加減ウザいぞ」

糸がさらに太くなる。

創「もうわけわかんねえ。バグか？ なんて  
嫌いなのに太くなってんだよ！」

香那「意味わかんねえ。頭大丈夫かお前？」

創「この糸がだよ」

糸が結ばれた小指を香那に見せる創。

香那には見えない。

香那「なんだよ。指突き出して、折って欲しいのか？」

創「なんでだよ！ もういいよ。お前の顔なんて見たくねえ」

香那「こっちのセリフだ！」

去っていく創。すれ違い様に詩絵が香那の元にやってくる。

詩絵「おまたせ。どうかしたの？」

香那「なんでもない」

詩絵、去っていく創を見つめている。

香那「詩絵はあいつのどこが好きなの」

詩絵「冷たいように見えて優しいところがあるところかな」

香那「ふーん」

創の後ろ姿を見つめている香那。

### ○高坂家・香那の部屋（夜）

ベッドに寝転んでいる香那。

香那「何様だあいつは！ なんてウゼェ奴！

でも今日はたくさん話せたな……」

枕に顔をうずめる香那。香那の指の糸は窓の外に向かっており、太くなる。

### ○早崎家・創の部屋（夜）

リクライニングチェアでくつろぐ創。

創「はぁ。くつろぐ。明日は休みだし幸せ」

そのまま目を閉じる創。

創の指の糸も窓の外に向かっており、  
どんどん太くなっていく。

### ○（夢）公園

創（7）が女の子（7）に手を引かれてブランコに向かっている。

### ○同（朝）

リクライニングチェアで誰かに腕を引っ張られる感覚があり、目が覚める創。

創「なんだ？」

創の指の糸がしめ縄の太さになってい

る。

創「なんじゃこりや！」

### ○高坂家・玄関前（朝）

香那と高坂純子（44）が家から出てくる。上機嫌の香那。

香那「今日の遊園地楽しみだね」

純子「昨日から機嫌いいわね。昨日学校でいいことあったの？」

香那「そ、そんなんじゃないよ！」

歩き出す香那、指の糸が太くなり張る。

### ○早崎家・創の部屋

糸がさらに太くなって張り、引っ張られていく創。

創「ま、まずい」

創、机の上のスマホと財布をとる。

### ○千賀久野駅・ホーム

電車に乗り込む香那と純子。駅員の出

発のアナウンスがなり扉が閉まる。

香那の指の糸は電車のドアの隙間に挟まる。何気なくドアの外のホームを見る香那。そこへ創がやってきてドアをこじ開けようとする。ドアが空き、車内に飛び込んでくる創、全身スウェット姿である。

創「あぶねー。マジで死ぬところだった」

香那「あんたバカなの？ 何してんのよ！」

創「悪いけど同行させてもらうわ」

香那「は？ なんで？」

創「仕方ないんだよ。離れられないんだ。ほらもう糸の長さが30メートルくらいだ」

指を見せる創。香那には何も見えない。

香那「意味わかんねえ！」

創「うるせえ。お前のせいだ！」

香那「なんでよ！」

創「頼むから俺を心の底から嫌ってくれ！」

香那「進行形で思っているわよ！」

吹き出し笑いする純子。



純子「香那が機嫌よかった理由がわかったわ」  
香那「（動揺して）そんなんじゃないから！」  
赤い糸がさらに短くなる。

### ○塔久野遊園地・ジェットコースター乗り場

隣同士で座っている創と香那。

前の席には純子が座っている。

香那「なんであんな横に座るのよ」

創「だから離れたら死ぬんだよ！」

香那「えっ、離れるのが死ぬほど辛い？ 何

言っているんだか」

糸が短くなり10メートル程になる。

前の座席の純子、振り返って香那を見

てニヤニヤ笑う。

香那「（照れて）そ、そんなじゃないから」  
発進していくジェットコースター。

### ○同・女子トイレ前

純子がトイレから出てくると創が入り  
口付近で壁にへばりついて立っている。

ギョツする純子。

純子「いつもそうやって待っているの？」

創「いや、そういうわけでは……」

純子「香那って口が悪いでしょ？ あの子はね、昔から気になる子がいると本音を知られまいと口が悪くなるのよ」

創「へえー」

純子「でもあの子は父親がいなくなってから私をすごく助けてくれているのよ」

創「それは意外だ。あ、いや……」

純子「いいのよ。本当は優しい子なの。今日も仕事で疲れていた私に気を使って遊園地に誘ってくれたのよ。仲良くしてあげてね」

創「でもなぜ遊園地なんですか？ 余計に疲れがたまるだけでは？」

微笑む純子。

純子「あの子はあれでも子供っぽいというか女の子らしい一面もあるのよ」

創「はあ……」

トイレから出てくる香那。

香那「（創を見て驚き）あんた何してんの？」  
変態なの？」

創「違うわ！」

香那「こんなの放っておいていきましよう、  
お母さん」

純子の手を引き歩いていく香那。

仕方なく後ろをついていく創、楽しそ  
うに純子と話す香那を見つめる。

香那、振り返って創を見る。

香那「これからお母さんと二人で観覧車に乗  
るからついてこないでよね」

### ○同・観覧車内

座っている香那と純子に申し訳なさそ  
うに座っている創。イラつく香那。

香那「ついてくるなって言ったよね？」

創「乗らなかつたら俺が吊されるんだ」

香那「はいはい。吊されればよかったわね。

必死に観覧車に乗ろうとしてウゼエ奴」

創「不本意だ」

香那「あっそ」

沈黙する車内。

創「くそ。気まずい」

あからさまな寝息を立てる純子。

創「狸寝入り？ 気を使って狸寝入りしたけど無理があるでしょ！」

香那「そんなことしなくていいよお母さん」  
狸寝入りを続ける純子。

香那「まったく。でもこういうところも可愛いよね」

創「お前って意外と優しいところあるのな」  
香那「（照れて）う、うるさい！ お母さんにはいつも頑張ってくれているから感謝しているのよ」

優しい眼差しで純子を見る香那。  
意外そうに香那を見る創、足元が震えている。

香那「あれ？ 足、震えてるぞ」

創「べ、別に。そんなことねえし」

香那「そーいやさつきから顔色良くないし、

もしかしてお前、高い所嫌いなのか？」

創「悪いかよ。昔、トラウマがあつて高いところ苦手なんだよ」

香那「だっせ」

創「うるせえわ。ん？」

香那「なによ？」

創「お前、俺と昔に会っていなかったか？」

香那「なにそれ。新車のナンパ？ ウゼエ」

創「そんなんじゃないやねえよ。あー帰りてえ」

### ○千賀久野駅・前（夕）

立っている創と香那と純子。

純子「今日はありがとうね」

創「いえ……」

香那「お礼言う必要ないわよ。勝手について

きたストーカーなんだから」

創「うっせえ。貴重な1日を邪魔しやがって」

香那「だからこっちのセリフだったの」

純子「仲がいいのね」

創・香那「よくない！」

純子「じゃあ私たちは晩御飯買って帰るから  
ここでね。今後も香那のことよろしくね」  
香那「しなくていい！ 早く行こ」

踵を返す香那と純子。

### ○高坂家・リビング（夜）

テーブルで食事をしている香那と純子。  
対面側に創が座っている。

香那「いい加減にしろよ。いつまでまとわり  
つく気だよ！」

創「俺も帰って部屋でリラックスしたいんだ  
よ。勘弁してくれ」

香那「言っていることがまったくわからない。

頭おかしいんじゃないのか」

純子「早崎くん、ご飯おかわりあるからね」

創「あ、じゃあお願いします」

香那「するなよ！ 帰れ！」

創「いいだろ。おいしいんだから。それに  
前が俺を嫌いになつてくれたら俺は家に直  
帰するよ」

香那「地球上で一番嫌いだよ！」

創「お前は口だけなんだよなあ」

香那「とつととそれ食べて帰れよな！」

### ○同・階段下（夜）

呆れた顔で創を睨む香那。

香那「私、もう寝るんだけど」

創「そうだな。まずいことになったよな」

香那「ひとごと!？」

創「悪いけど泊めてくれ」

香那「なっ、ふざけんな」

顔が赤くなって照れる香那、階段を駆

け上がっていく。3メートル程の糸に

短くなっているので引っ張られてる創。

創「痛たたたた」

香那が階段下を振り返ると創が倒れた

まま階段を上ってきている。驚き、恐

怖する香那、叫び声を上げながら創を

思いつき蹴飛ばす。

○同・香那の部屋（夜）

ビニール紐で手足を縛られている創、  
右頬は蹴られて腫れている。

創「なんでこんな仕打ちを受けているんだ」

香那「あんたが気持ち悪い大道芸で追いかけてくるからでしょ！」

創「好きでやってるんじゃないわねえわ！ それに  
なんで縛られているんだよ」

香那「当たり前前よ。野蛮な男が女の子の部屋  
に入ってきて何もしないわけないでしょ」

創「どこに女がいるんだよ。だからさっきか  
ら言っているだろ。糸で離れられなくなっ  
ているんだって」

香那「そんなこと信じられないわ」

創「じゃあ俺は目を閉じるから左手を左右に  
振ってみろよ」

香那「なんでそんなこと」

創「いいから」

香那に背を向け、目を閉じる創。香那  
が左手を勢いよく右に降ると創もつら



れて右に吹き飛ぶ。驚く香那。

創「おい。もっとゆっくりやれ」

左手を左に振る香那。創も左に吹き飛ぶ。嬉しそうに笑う香那。

香那「なにこれ。おもしろーい」

左手を左右に振る香那。その都度振り回される創。

創「バカ。遊ぶな。ちよつと止めろ。痛たた。ちよつとやめ、やめてください」

手を止める香那。創も止まる。

香那「おまえ変わった特技持っているんだな」

創「だから俺が好きでやってんじやないの。」

これのせいで散々なの。死にそうなの！」

香那「わかったよ。信じてやるよ。お前はアホみたいな嘘つかないしな」

創「おお。ありがとう」

ニコリと笑う創に動揺する香那。

二人の間の糸がさらに短くなる。

創「こんなことで惚れ直すなよ……」

香那「（慌てて）ち、違う」

創「まあいいや。でも信じてくれて嬉しいよ」

香那「だからって調子に乗るなよ。さっさと寝ろ」

創「言われなくても寝るよ」

縛られたまま横になる創。

沈黙する室内。目を開けて起きる創。

創「ああああああ」

香那「（驚き）な、なによ！」

創「一人になってリラックスしたい！ 同じ

部屋に誰かいると不安で眠れない！」

香那「うるさい！ とつとと寝ろ！」

創「（落胆して）はい……」

再び沈黙する室内。

香那「ねえ」

創「なんだよ。寝るんじゃないのか？」

香那「なんで私につきまとうんだ？」

創「それはお前が俺のこと好きだからだよ」

香那「なんでそう言い切れる？」

創「俺は女からの好意の視線がわかる。仕草や視線でな。お前は俺に惚れている」

香那「ふざけんな」

創「事実だろ？」

香那「か、仮にそうだとお前はどうかなんだよ？」

創「は？」

香那「お、お、お前はどお思っているか聞いている」

創「そんなの決まっているだろ。俺は一人がいいんだ。一人で自分のペースで自由気ままに生きていきたい」

香那「ふーん。相変わらず寂しいやつだな」

創「なんだと？」

香那「お前自分が寂しいやつだと気付いているか？ 一人が寂しいって知っている癖に」

創「どういうことだよ？」

香那「おやすみ」

創「意味わかんねえ」

月夜の光が窓から差して、本棚の上に置かれた香那と純子のツーショットの写真が目に入る。

創「一人が寂しいって知っている……か」  
目を閉じる創。

○（回想）早崎家・創の部屋（夜）

タイトル『10年前』

ドアの前で座り込む創（7）。ドアの外から両親の罵り合いの声と食器の割れる音が響いている。両耳を塞ぐ創。  
創「一人になりたい……」

○高坂家・トイレ前（朝）

トイレ前のドアにへばりついている創。  
やってきた純子と目が合う。  
創「これには重大な理由があるんです。糸がもう1メートルもなくてですね」

見ていないフリをして去っていく純子。  
トイレの中から香那が出てきて、創を見下した目で蔑む。

香那「よう、変態」

創「だから違うって！」

家のチャイムが鳴る音が響く。

香那「しまった！ 今日、詩絵と遊ぶ約束してたんだった！」

創「詩絵？ 誰だ？」

香那「クラスメイトの坂井詩絵よ。まずいな。隠れてて」

創「いや無理だ」

香那「バカ言っていないで隠れろ。あんたがいたらまずいのよ」

チャイムの鳴る音が響く。

### ○同・玄関前

玄関に向かう香那。ついて来る創。

香那「だからついてくんなってんの！」

創「昨日説明しただろ？ もう諦めろって」

香那「ふざけんな！」

玄関が開いて詩絵が戸惑っている。

詩絵「なんで早崎くんが香那の家にいるの？」

香那「それはこいつが昨日勝手についてきて」

詩絵「まさか泊まってたの？」

香那「泊まってない！」

創「お前の部屋で泊まっただろ」

詩絵「泊まったんだ……しかも同じ部屋で」

香那「お前は喋るな。そこで突っ立ってる！

違うの。これはこいつが無理矢理にね」

創「そんな俺が強引に誘ったみたいなこと言

うなよ。元はと言えばお前が俺のこと好き

だからだろ」

詩絵「そうなんだ……」

香那「違う！ 違うから。お前は適当なこと

言うな。昨日の遊園地から変なんだよ」

詩絵「遊園地行ったんだ……デートじゃん」

香那「それはお母さんと行ったのにこいつが

勝手についてきたのよ」

詩絵「もういいよ。ごめん私、今日は帰る」

玄関の外に出て行く詩絵。

香那「待って。誤解だよ！」

詩絵を追いかける香那。急に走った香

那に引きずられる創。創に気を取られ

ているうちに玄関の扉が閉まる。立ち

尽くす香那、振り返って立ち上がった

創を睨む。

創「な、なんだよ」

創の顔を平手打ちする香那。

創「痛って。何すんだよ！」

香那「あんたのせいで台無しよ」

創「はあ？ 何がだよ？」

香那「帰れ！」

創「だからこの糸さえ切れたら……」

小指を見る創。糸が消えて無くなって  
いる。

創「あれ？ 消えてる。消えてるし！」

嬉しさのあまり笑顔になる創。

創「やった。切れてる。切れてくれた。自由

になった。やったぜ」

香那「何が嬉しいの？」

創「なにかって決まっているだろ。糸が

……」

香那の顔を見て、言葉に詰まる創。

香那の目には涙がたまっている。

創「（動揺して）昨日から悪かったな。もう付きまとわらないから」

香那「そうして。金輪際、一生ね」

玄関から出て行く創。

その場にうづくまる香那。

### ○同・玄関前

玄関から出てくる創。

創「なんだよあいつ。全然わからねえ。けどいいや、やっと解放された。でもなんで急に糸が切れたんだろう？」

ふと前を見ると詩絵が立っている。そして詩絵から赤い糸が伸びてきて創の指に結ばれる。

創「はあああ。またかよ。けど待てよ……」

詩絵に近づいていく創。

詩絵「早崎くん。さっきはごめんね。気まずくなつたよね」

創「まあ、いいよ」

詩絵「私、実は早崎くんのこと、前から気に



なっていて……」

創「ああ。知ってる」

詩絵「（驚き）え、なんか照れるね」

創「それであいつも俺のこと好きだった」

詩絵「え、そうだったんだ。あの子、何も言わなかったから」

創「嘘つけ。知っていただろ」

詩絵「えっ」

創「俺でもわかったんだ。簡単に。ずっと側にいたお前が気づかない訳ないだろ」

詩絵「……」

創「あいつの気持ち知っていてお前は利用したんだ。あいつなら気持ちを押し殺して譲ってくれるって見透かしていたんだろ？」

深くため息をつく詩絵。

詩絵「…… そうだよ。その何が悪いの？」

創「別に。だがお前はズルい奴だ」

詩絵「そうよ。でもそうしないとあなたに届かないから仕方ないじゃない。恋愛はそうやって周り蹴落として進まない成就なん

てしないのよ」

創「そうなのか」

詩絵「私だけが悪いんじゃないわ。大なり小なり、みんなそうしているもの」

創「ふーん。だがお前ならあいつが今、どんな気持ちでいるか簡単に分かるだろ？」

詩絵「……」

創「そりや自分が一番だしさ、お前の言っていることもわかるよ。でも俺はさっきのあいつの顔を見てしまったからな。俺はお前の気持ちに応えることはできない」

詩絵「…… だと思った」

2人を繋いでいた赤い糸が切れる。

### ○ファストフード店・店内

創と倉橋が座っている。

倉橋「ふーん。そんなことがあったんだね」

創「大変だったぜ。でもこれで晴れて俺は自由だ。結構な女に暴言を吐いてきたからな。噂が回ってもう好きになる女はいないだろ」

倉橋「それでいいの？」

創「？　いいに決まっているだろ？」

倉橋「僕は創が逃げているようにしか見えな  
いけどなあ」

創「逃げる？　俺が？」

倉橋「仲良くなっても嫌われるのが怖くて逃  
げているのだろ？　両親の醜悪を見て怖が  
っているんだ」

創「ふん。まさか」

倉橋「それに子供の頃のトラウマが追い討ち  
をかけている」

創「それは言うな」

倉橋「女の子にブランコから降ろしてもらえ  
なくておしっこ漏らされた。しかもその光  
景を見ていた女の子にクラス中言いふらさ  
れたなんて、そりや女に抵抗感もつよなあ。  
しかも高所恐怖症になるし」

創「（赤面し）皆まで言うな！　それに俺が  
恋愛嫌いなのは家族が崩壊しているからだ。  
母さんは浮気しているっぽいし」

倉橋「えっ、本当に？」

創「最近、こそこそメールでやりとりしているんだ。父さんが出張でいない間にだぜ。

怪しすぎだろ」

倉橋「まあ、とにかく変に拒否しないでさ、

素直な気持ちで動いてみなよ」

創「俺はいつも素直だ。一人で自由に時間を使う。これが俺の本心だよ」

視線を窓の外にそらす創。

創「今日はもう帰るわ」

店からでていく創。倉橋もドリンクを

飲み干した後、席を立つ。

### ○公園前

歩いている創。公園に気づき、中を

苦々しく見つめる。

### ○（回想）同・中

タイトル『10年前』

ブランコに乗っている創（7）

創「もうやめてよう」

ブランコを勢いよく押している女の子。

創「怖いよ。やめてよ」

楽しそうに笑っている女の子。

創「あああああ」

### ○元の公園前

眉をしかめる創、空に向かって叫ぶ。

創「あああああああ。くそっ。あの女、トラ

ウマ植え付けやがって。ん、待てよ。あの

女、まさか……」

### ○(回想)公園・中

ズボンを濡らして泣いている創。

遠くで女の子が創を見て、ニヤリと笑

って公園を飛び出していく。

女の子「ふん。何おしっこ漏らして泣いてい

るのよ。ウゼエ奴」

女の子を睨む創。面影が香那と重なる。

その女の子は香那(7)である。

## ○元の公園前

口を開けて呆然としている創。

創「あの女、あいつだったのか！ くそつ、  
ますます腹が立ってきた。帰って忘れよ」  
公園を後にする創。

## ○早崎家・リビング

中に入る創。ソファでは早崎真梨

(42) が携帯でメールを打っている。

創に気付いて携帯を閉じる真梨。

真梨「おかえりなさい。ご飯、冷蔵庫に入っ  
ているから」

創「うん」

真梨「じゃあ私は寝室にいるから」

携帯を再び広げ、リビングから出て行  
く真梨をじっと見る創。

創「フン」

ソファに座りテレビをつける創。  
サッカー選手と女性タレントが会見を

開いている。

サッカー選手「欧州のクラブへ移籍することに決めた時に彼女に琴欧州って誰？ って聞かれて説明したら振られました。その時に赤い糸も消えて見えなくなっただんです」

女性タレント「でもお、よく聞いたらあお金たくさん貰えるって聞いてえ。もう一度付き合ってたって言ったんですう」

サッカー選手「彼女は正直頭悪いですけど正直なところが好きで、その気持ちに気付いた時にまた赤い糸が見えたんです。今度は真っ赤でしたっけりとした綺麗な糸がね。おそらくこれが本当の赤い糸なんでしょう」

テレビを消す創。

創「しょーもなっ」

### ○同・創の部屋

リクライニングチェアに座り音楽をかける創。そして小説を読みだす。

創「さあ、久々の至福の時だ」

リラックスした表情の創。

○（回想）塔久野遊園地・女子トイレ前

手をつないで歩いている香那と純子。  
楽しそうに話している香那を背後から  
見ている創。

○早崎家・創の部屋

眉をひそめ首を振る創。

○（回想）塔久野遊園地・観覧車内

優しい眼差しで純子を見る香那。意外  
そうに香那を見る創。

○（回想）高坂家・香那の部屋（夜）

ベッドで横になる香那と床で横になっ  
ている創。

香那「相変わらず寂しいやつだな。お前自分  
が寂しいやつだと気付いているか？ 一人  
が寂しいって知っている癖に」



○早崎家・創の部屋

次第に険しい顔つきになってくる創。

○（回想）高坂家・玄関前

目に涙をためた香那が立っている。

○早崎家・創の部屋

本を閉じて立ち上がる創。

創「ああああ。全然落ちつかねえ！」

ふと小指を見るとキラキラと真っ赤な

糸が繋がっている。驚く創。

創「これはまさか……」

部屋を飛び出していく創。

○ファミレス

座席で携帯で話している詩絵。

詩絵「了解、彼が動いたのね。動くわよ」

携帯を切り、席を立つ詩絵。

○歩道橋（夕）

スーパーの袋を持って歩いている香那。

香那「詩絵ってば歩道橋に来たって何の用だろう？ でもきちんと説明して謝らなくちゃ。うん、これでいいんだ」

目の前に創が息を切らせて立っているのに気づく。

香那「なんだよ。金輪際つきまとうなって言ったよな？」

創「うるせえええ！」

香那「（驚き）な、なんだよ」

創「お前は口が悪いし、うざいし、大嫌いなんだよ！ 俺には冷たい態度のくせに母親想いでよ。遊園地になんか普通いかねえよ」

香那「うるせえな。いいだろ。好きなんだよ」

創「赤い糸が太く短くなるまで好きだったのに友達のためにバツサリと切ってさ。バカじゃねえの？」

香那「お前、何が言いたいんだよ？」

創「わかんねえ。なんか見えていてイライラすんだよ。気になって仕方ねえ！」

香那「何言ってるのかわかんねえよ」

創「そっくりなんだよ。お前は俺に」

香那「はあ？」

創「俺はずっと一人がいいと思っていた。両親はずっと喧嘩してたからな。子供が親に願ったのは『仲良くして』じゃない。『一人になりたい』だ。どれだけ悲惨だったかわかるだろ？」

香那「……」

創「だから俺は一人を好んだ。気楽でいいつてな。でもそれは一人が怖いくせに嫌われるのが怖くて一人でいただけだ。けどお前は違った」

香那「私？」

創「お前は一人でいる怖さを知っていて、さらに輪の中に入っていった。友達がたくさんにいて、その中心にいて、そんなお前が気になっていたのかもしれない」

香那「私にはお前が一人で殻に閉じこもろうとしているように見えてイラついていた。」

だけどその気持ちがわかるから気になって  
いた。最初は同情したんだろうな」

創「それにお前には責任がある」

香那「責任？ なんのだよ？」

創「小学生の時、公園のブランコで俺にトラ  
ウマを植え付けた罪だ」

香那「ああ、シヨンベン事件だろ？ あれは  
傑作だったな」

創「でかい声で言うな！ っていうかお前は  
俺のこと覚えていたのか？」

香那「（半笑いで）あんな出来事なかなか忘  
れられねえよ」

創「忘れろ！ とにかくあのことをクラスミ  
んなにバラされて、笑われて、俺は女が大  
嫌いになったんだ」

香那「そんなこと私の知ったこっちゃないわ  
創「とにかくお前は俺をこうした責任がある  
んだよ」

香那「あの時のことそれしか覚えていないの  
か？」

創「？ それ以外に何かあるのかよ？」

香那「あの日、私は救われたんだよ。お前に」

創「救われた？ 俺にか？」

こくりとうなずく香那。

### ○（香那の回想）公園内

ズボンを濡らし泣いている創（7）。

おろおろしている香那（7）。

香那の声「あの時、てっきり恥ずかしくて泣

いているんだと思ったんだよ」

香那、見かねて話しかける。

香那「悪かったよ。もうそんなに泣くなよ」

創「ごめんね」

香那「えっ？」

創「漏らしちゃったからもう一緒に遊ばなく

なっちゃった。ごめんね」

香那「え、それで泣いているの？」

創「だってせっかく誘ってくれたのに。楽し

かったのに…… ごめんね、こんなカッコ

悪いぼくで」

公園から去っていく創。

呆然と創の後ろ姿を見ている香那。

香那の声「でもお前は一緒に遊べなくなったことを嘆いていたんだ。その時の私には衝撃だったよ」

### ○歩道橋（夕）

驚いている創と嬉しそうな顔の香那。

香那「あの時、私はお父さんを事故で亡くして一人であることが多かった。だから友達が欲しくて。でも嫌われたらダメだって気が負いすぎてどうしてもいいかわからなかった。

そんな時に会ったのがお前だったんだ」  
創「でもあの時の俺、カッコ悪すぎだぜ？」

香那「そんなことない。カッコ悪くても友達のことを思っていたあの時のお前はカッコよかったよ。あの後、引っ越して会えなくなっただけ、それから私はカッコ悪くても怖がらずに友達を作ろうと思ったんだ。あの日のお前みたいにな」

創「そうか。あれからクラスの子に笑われて  
恥ずかしいと思ったけど、お前の前ではそ  
んなこと言っていたんだな」

香那「（微笑んで）高校で再会した時は驚い  
たなあ（小声で）でも私の見る目は間違っ  
ていなかったよ」

創「えっ？」

香那「（照れて）い、いや何でもない」

見つめ合う創と香那。

詩絵の声「何イチャイチャしちやってんのよ」  
振り返る創。詩絵が立っている。

詩絵の後ろには佳織、未来、奈津、花  
恵も立っている。

創「なんだ？ お前ら」

詩絵「私たちは早崎創被害者の会よ」

創「は？ なんだそれ？」

詩絵「あなたに理不尽にフラれ深く傷ついで  
た被害者の集まりよ」

佳織「私の心は深く傷ついたわ」

創「俺を階段から突き落としておいてよくそ

んなこと言えるな」

未来「あれから食事が喉を通らない」

創「嘘つけ。あんた俺を本当に10発殴って  
すつきりしたって帰っていっただろ！」

奈津「私の理想像を壊した罪は重いです」

創「勝手にドン引きしていたよね？」

花恵「アラフィフの教師が生徒に恋をしたら  
いけないですか？」

創「悪いわ！」

詩絵「とにかく私たちはあなたに深く傷つけ  
られたのよ。責任を取ってもらうわ」

未来「そうだよ。あんなにきついこといつて  
よ。お前、訴えられたら負けんぜ」

創「それには事情があつて、完膚なきまで叩  
かないと糸が切れないんだよ」

奈津「もうそんな妄想言わないでください」  
創「あーわかったよ。何をやればいいんだよ」

詩絵「簡単よ。香那、あなたも早崎くんから  
身を引くのよ」

香那「え……」



詩絵「それで私たちのメンツは保たれるわ。

誰のものでもないならそれでいい」

創「相変わらず自分勝手だな」

詩絵「あら、あなたにとっても願ったりじゃないの？ 恋愛嫌いの早崎くん」

創「それは…… そうだけど」

佳織「早崎くんが誰かのものだなんて耐えられない」

未来「私をフったなんて事実、なくしてもらおうわ」

奈津「変態を好きになったという事実もなくしたい」

花恵「私はまだあなたのこと諦めていないわよ。お金なら……」

詩絵「（遮り）さあ、香那。あなたも6人目の被害者になるのよ。そして慰謝料として未来永劫、なんでも言うことを聞いてもらうピエロにしましょう」

創「お前が一番タチ悪いわ！」

香那「私は……」

詩絵「香那、私たち友達よね？」

考え込む香那。

創「やめろよ……」

香那「えっ」

創「もう自分の気持ちに嘘をつくなよ。そんなのは優しさでもなんでもねえんだよ。俺にはわかるんだ」

香那「わかるって何がよ？」

創「お前の気持ちいだよ。単純なお前のことなんてお見通しなんだよ！」

香那「ふざけないで。私のなにがわかるって  
いうのよ」

創「すべてだよ。お前は俺のために嘘をつこうとしている。だろ？ いいか、そんなこととしても俺はお前のそばにいてやるぞ」

香那「な、なんで」

創「もう決まっているからだ。俺とお前は繋がっているんだよ」

詩絵「なにそれ。プロポーズ？」

しまったという顔の創。照れる香那。

創「ち、違うわ！ ああ！ もう面倒クセエ」

歩道橋の欄干に手をかけ、足を震わせ、上に登る創。呆然としている女性たち。

香那「ちよつと、なにしてんの？」

歩道橋の下では車が行き交っている。

創「見せてやるよ。証拠ってやつをな」

香那「ち、ちよつと……」

足の震えを止め、目を閉じる創、

欄干の上から落ちる。

詩絵「え……」

佳織「きゃあああああ」

ゆっくりと目を開ける創。すると香那が創の腕を掴んでいる。香那との赤い糸も繋がってる。

創「ほらな？ 離れられねえよ」

香那「バカっ。早く上がってこい！」

引き上げる香那。すると勢い良く創が歩道橋の上に戻ってくる。

香那「うおっ、軽いなお前」

創「そりゃ繋がっているからな。これでわか

「ただろ、俺はお前とは……」

香那の顔を見て言葉が詰まる創。

香那の目は涙目になっている。

香那「バカっ！　なんて無茶すんだよ！　死

んだかと思っただぞ！　高所恐怖症のくせに」

創「だとしてもこれをやる価値はあると思っ

たんだよ。心配させたな」

香那「別に心配……　心配させんなバカ！」

創「（ばつが悪そうに）悪かったな。黙らせ

るには手っ取り早いと思っただよ……」

香那、詩絵の方を向いて、

香那「詩絵、ごめん。私、やっぱり自分の気

持ちに嘘つくことできない」

詩絵「諦めることはしないと言うの？」

香那「うん。こいつ訳わからないし、ウザい

し、自分勝手に不躰で礼儀知らずなバカだ

けど……　私にとって大事な人なの」

照れずにまっすぐ詩絵を見る香那。

創「……」

詩絵「わかったわ。香那がいうなら仕方ない」

香那「えっ、いいの？」

詩絵「うん。だって私たち友達でしょ？」

香那「詩絵…… ありがとう」

詩絵「じゃあ帰ろうか」

佳織「えっ、これでいいの？」

未来「全然気が済まないんですけど」

奈津「でもこれでいいんじゃない？」

花恵「私は諦めないわ。あなたたちと違って

私には時間が……」

詩絵「（遮り）先生。帰るわよ」

花恵「忘れないですよ。あなたたちの幸せは私

みたいな人の上に成り立っていることに」

詩絵「さあ、慰み会開くわよ」

去っていく詩絵、佳織、未来、奈津、

花恵。

創「おい」

詩絵だけ立ち止まり、振り返る。

創「悪かったな。朝はひどいこといって」

詩絵「なんの話かしら？」

創「わざとこいつをけしかけたんだろ？」

香那「えっ、そうだったの？」

創「お前は自分勝手じゃない。友達思いのいい奴だ」

詩絵「買いかぶりすぎよ。私は自分に勝機がないとわかったから親友をたてただけ。所詮自分勝手な奴よ」

香那「詩絵……ありがとう」

詩絵「どうせあんたたちこれくらいしなないと進展しないだろうしさ。私からのプレゼントと思いなさい」

創「別に俺はこいつとそういう関係になるつもりないし」

香那「私もなんでこんな奴と」

詩絵「（遮り）はいはい。もうそれいいから。

香那、素直になりなさいよ。初恋の相手でしよ？」

香那「（照れて）そ、そ、そんなことないし」

詩絵「でも初恋っていうのは実らないものよ」

香那「（慌てて）えっ、ど、どうしよう？」

詩絵「さあ、隣の人に聞いてみたら？」

手を振り、去っていく詩絵。

創「いい友達を持ったな」

香那「うん」

創「俺もそんな友達が欲しかったぜ。なあ！」

背後に声をかける創。

倉橋が姿を見せる。

倉橋「何言っているんだよ。僕ほど縁の下タ

イプの友達思いの奴はいないよ」

香那「どういうこと？」

創「陰でコソコソ見てたのが見えたんだよ。

どうせずっと俺の後をつけてきてたんだろ」

倉橋「否定はしないけど見てるだけじゃない

よ。歩道橋に人が来ないように堰き止めて

いたんだから感謝しろよな」

創「面白がっていただけだろ」

倉橋「そんなことないって。大変だったんだ

よ。映画の撮影だって嘘ついてさ。歩道橋

から飛び降りてた時は驚いたし。けどまあ、

面白いところが見れたからよしとするよ」

創「やっぱり面白がっていただけじゃねえか」

倉橋「いやいや。創も成長したなと思ってさ。

じゃあ、邪魔者は退散するよ」

去っていく倉橋の背後に向かって、

創「ありがとな」

そのまま去っていく倉橋。

大きくため息をつきその場に座る創。

創「なんて濃い数日間だったんだ」

香那「本当ね」

沈黙する創と香那。

創「そういや俺たちケンカしてたよな」

香那「そうよ。私はまだ許してないんだから」

創「許してやってもいいぞ」

香那「（創を睨んで）ほんとウゼエ奴。女の

子にいいようにされちゃって恥ずかしいな」

創「フン。まあ、でもお前の前では俺はいつ

もカッコ悪いとこばっか見せてるな」

香那「そんなことない。あなたはカッコ悪い

けど、カッコイイよ。いつも輝いてるわ」

言ってから照れ出す香那。

創も照れて香那から顔をそらす。



そしてそらしたまま話す創。

創「俺は一人で本を読むのが好きだ」

香那「？」

創「一人でいる時間が好きだ。これは変えるつもりはない。でもお前一人くらいなら一緒にいてもいいぜ。ほら、仲直りの握手だ」

香那を見て、手を差し出す創。

呆れた顔の香那。

香那「なんだよそれ。偉そうに、何様だよ」

間が空いて、創の手をそっと取る香那、  
ゆっくりと創を起こす。

創「家帰るんだろ？ 袋、持ってやるよ」

香那「そう言ってまた飯食って帰る気だろ？」

創「バレたか。お前のおばさんの飯うめえな」  
肩を並べ歩いていく創と香那の後ろ姿  
を夕焼けが照らしている。

### ○早崎家・玄関（夜）

玄関内に入る創。見知らぬ靴があるの  
に気づく。

## ○同・リビング

中に入る創。中では早崎真（45）  
と真梨が楽しそうに談笑している。

真「お、帰ってきたか」

真梨「お帰りなさい」

創「なにしてんの？」

真「なにって、出張から帰ってきたんじゃないか」

創「いや、そうじゃなくて、なんで仲良くしているんだよ」

真梨「それがね、私たち仲直りしたのよ」

創「は？」

真「いや、な。別れる気満々で過去の話していたらなんだか懐かしくなっていたの間に  
か仲直りしていたんだよ」

創「なにそれ」

真梨「実はもう前からメールのやりとりしていたのだけど創には言い出せなくてね」

創「あ、やけにメールしているなど思っていたけど……じゃあ、最近引きこもっている

たのは……」

真梨「うん。創に会わせる顔がなくてこもつてお父さんにメールで相談していたのよ」

創「なんだよ。大喧嘩して冷めきっていたじゃないか！ どんだけ俺が辛い思いしていたかと思っっているんだよ！」

真「すまん」

真梨「ごめんね」

創「軽っ！ はあ。もうどうでもよくなったよ……」

真「男と女の間は複雑なんだよ」

真梨「ごめんね、辛い思いさせて。でも今日からは仲良くするから」

真「なんだよお前、しばらく見ないうちにえらくニヤついた顔になったな。彼女でもできたか？」

真梨「あら、そうなの？ どんな子よ？」

　　楽しそうに笑っている真と真梨。

創「やっぱり恋愛ってわけわかんねえ……」  
　　呆れた顔の創。

○千賀久野高校・校門前（朝）

登校している創と倉橋。

倉橋「なんだか今日は機嫌良さそうだね」

創「そうか？ 別に普通だよ」

後ろから歩いてきた香那と肩がぶつかる創。

創「痛って。って、またお前か！」

香那「相変わらず邪魔な男だな」

創「朝から鬱陶しいやつだ！」

香那「お前がな！」

言い合いをしながら歩いていく創と香

那。呆れた顔で傍観する倉橋。

香那「うるせえよ。シヨンベン野郎！」

創「あ、それ言う？ もう時効だろ！」

嬉しそうに笑う香那。創もまんざらでもない様子。

○（回想）同・校門前（朝）

歩いている創と倉橋。

創「くっつだらない。なにが運命の赤い糸だ」

倉橋「実は二人は子供の頃に出会っていた。  
二人が結ばれるのは運命だったんだーとか  
でしょ？ ロマンチックでいいじゃない」

○（回想）公園内

砂場で遊んでいる創（7）の元に

香那（7）がやってくる。

香那「一緒に遊ぼう！」

創「うん！」

手をつなぎ歩いていく創と香那。

○千賀久野高校・校門前（朝）

隣の香那を見てフツと笑う創。

香那「なに笑ってんだよ。気持ち悪いな」

創「なんでもねえよ」

歩いていく創と香那。

二人の間にはキラキラ光る真っ赤な糸  
が結ばれている。

（終）